923
148145

湖月抄

花のえん

13

花宴

花　詞をもつて名とせり但巻の詞ニハ南殿の桜の宴せさせ給ふとありて奥の二条の后とよばれ給ふの宴乃下ニハ藤の花の宴をも給ふとあるハ皆よつてし巻の名をも花の宴とハいふなるかなと覚え侍る也古来花の宴とハ桜を賞翫する事と心得侍るにより（是）ハ禁中の事也これも私の家にて宴ありしを南殿の桜乃宴になぞらへて名目とせらると心得べきなり　箋云　巻ノ名ハ南殿ノ桜ノ宴ノ事也則花ノ宴也　細　唐ニてハ花と云へハ牡丹日本にてハ花といふハ桜也桜ノ宴ノ花ノ宴ハ差別あるべからず　孟　此巻ハ紅葉の賀乃次の年也と云也　源氏十九歳宰相中将正三位也　細　暁日　花ノ宴之例　花　国史云弘仁三年二月辛丑幸神泉苑覧花樹命文人賦詩賜綿有差云々　花宴ハ濫觴也又云桐壺帝を醍醐ニ准じ奉りよつて彼御宇花宴をいはれし事延喜十七年三月六日常寧殿花宴詩題春夜翫桜花延長四年二月十七日清涼殿花宴詩題桜

7152

繁春日詠此两度之例によるべしと云々探韻作文御遊具奉
ありけれ 南殿花宴例事 花 村上天皇康保二年三月植桜樹
於南殿有花宴詠古詩誦新歌云々 此時ハ探韻なとハなかり
しかども南殿の桜を御遊びの例也又醍醐の御世の坊士事な
きこしめ准拠に用ひしなるべし

きさらぎのはつかあまりのころかゑん 細 延長四
年二月十七日の宴此花の
准拠ぞね南殿より醍醐の御門
延長八年代の末也今この花
宴も同じ醍醐の御代の末なれば延長ぞ
二月廿余日も数へて延長よ
叶へり 河 南殿桜紫宸殿
の巽にあり是大略草創
よりの樹也貞観に枯といへども根よりまた萌
ぞへどもこれ上瀬守これをうゑ
枝葉再盛云々 師云右近
の桜と云是也今も紫宸
殿の南階ちかくにあり拾芥
抄云中納言府作南殿前庭
桜樹者本是梅也桓武天
皇遷都之日所被植也而
及承和年中枯失仍仁
明天皇被改樹也云々
花延喜の帝常寧殿の
花宴も宴席とい清涼
殿とへひしきにこそ此御
殿の花の宴も南殿乃

きさらぎのはつかあまり、なんでんの桜
の宴せさせ給ふ。后春宮の御つぼね左右
にして、まうのぼり給ふ。弘徽殿の女御、中宮
のかくておはするを、をりふしごとにやすから
ず思せど、物見にはえすぐし給
はで参り給ふ。日いとよく晴れて、空の気色
鳥の声も心ちよげなるに、親王達
上達部よりはじめて、その道のかぎりは
探韻給はりて文つくり給ふ。宰相
中将「春といふもじ給はれり」とのたまふ
声さへ例の人にことなり。次に頭中将、人の
めうつしもただならずおぼゆべかめれど、いと

探韻後ありて宴とハ清涼殿よりうつらせ給ひてよりと見ゆる事とも有べし 明 花宴 延喜の例

后春宮 細 右ハ弘徽殿女御也。春宮ハ朱雀院なり。

左右にて 細 南殿の東面也。后ハ左東なるべし。春宮ハ右西なるべし。此義可然かるべし。或ハ宴あれハ南殿よ

とり引く清涼殿より御せ給ひてとかくへしき

てハそのさまにかハりけるや

こきでんの女御 細 かやうに中宮をとかく思ひ給へるを思ひやり給ひて、今日ハ中宮をこそ

目とゞめられて 細 中宮の御気色をみて、さしも宴の中の事を思ひやり給ふ。末代迄の例

みるにつけても 細 御心の中の

らんあんなうて 細 韻の字を一字つゝさぐりてそれを韻として詩を作也。

一説云 先第一ニ置二硯蓋一、儒者兼テ献二題ヲ、次ニ書テ韻字ヲ盛二硯蓋一置二庭中ノ案ノ上ニ一、近衛次将先探二御料ノ韻字一、次ニ公卿、堪能ノ文人等各進テ案ノ下ニ探リ取テ一字ヲ見之

登ル二官姓名及所レ探字一也。今案 探韻ハ各分二一字ヲ詩也。悉韻字賜也。故ニ懐紙端作ニ云 春日同賦二春花一

龍樓ヲ各分テ一字ヲ應レ制ス詩 探得某字 如此可書也 明 韻字を一字つゝ探えらべく作之。其作法ハ文人

と儒者の宣て後ち古詩を一字つゝあつめてさる韻の名目或ハ時によりて題を用ひ庭上にて

儒者の文臺の上に置也。それを中にお納めて主上の御まへに韻字を二つ取て奉る。文臺に

置き御覧ありて一字用ゐる。のこりの字を諸臣ハ各一字を探りて作者十人わけ一人の詩二句

と一字つゝ韻より此ときに十四人の時ハ七言二句也。凡周の字や悉韻の字ハうつくし

さいしやう中将 河 真淳韻也 細 韻字を探りてハ各其人より奏して官姓

名伝への字をあらはすもの也。今日の花宴に春の字さくりえたる事自然の幸也。これよりひ

容儀にかなひまいらするとなり

めでたくおもしろきとて中将の

ひはかしこくいかはりて

乃くちもつれてこそかゝかしこ

めやすくもてしづめてこわづかひなども

のし〳〵くすぐれたりさての人々ハ

みな臆しがちに 細 臆 花宴

はなじろめる 明 今案

らいとかしこく… 細 文臺の

ちかよりかたく 明 探韻のかた

乃いよ〳〵ゆるしがたきを細

わたしかちかくさゆるのに

乃さかとの給ひけれど地下の人

ちかくはなじろみて 細 延長四

年の例を用ゐて書るとかし

みなされどもいはゞ楽の

されど〳〵ことわりにもなく

いかにもうつくしく栄花ことに

花宴にさへのかし楽のあてし

天暦三年二月廿一日、二月廿二日、御遊

調遊あり、花宴同月二十二日宴

殿の花宴、花宴有、楽所

勅楽春鶯囀、又此外に舞人を

ふらく殿上の舞ハなとゝ云

がちにはなじろめるおほかり。地下の文人ハ

まして帝春宮の御ざえかしこく

すぐれておはします、かゝるかたにやむごとなき人おほく

ものし給ふころなるに、はづかしくはる〴〵と

くもりなき庭に立出るほど、はしたなくて

やすきことなれど、くるしげなり。年老い

たるはかせどもの、なりあやしくやつれて

れいなれたるも、あはれにさま〴〵御覧ずる

なんをかしかりける。楽どもなどハさらにも

いはずとゝのへさせ給へり。やう〳〵入日になる

ほど、春の鶯さえづるといふ舞いとおもしろく

見ゆるに、源氏の御紅葉の賀のおりおぼし

細 天暦の御例なり [illegible] 春鶯囀 一越調 大曲 新楽

[illegible]

出られて春宮かざし給はせ

てせちにせめの給はするにのがれがたくてたちての

どかに袖かへすところをひとおれけしきばかり

まひ給へるに似るべきものなく見ゆ 左のおほいどの

うらめしさもわすれて涙おとし給ふ 頭中将

いづらおそしとあれば 柳花苑といふ

舞をこれは今すこしすぐしてかかることも

やと心づかひやしけんいとおもしろければ御衣

たまはりていとめづらしき事に人思へり

[illegible]

吉祥天女ノ舞ノ術柔ニ静ニ而已 云々

[illegible]

夜に入りてはことにけぢめも見えず

文など講ずるにも源氏の君の御をば講師もえよみ

やらず句ごとに誦じののしる 博士

どもの心にもいみじう思へり かうやうの

をりにもまづこの君を光にし給へれば

みかどもいかでかおろかにおぼされん 中宮

御目のとまるにつけて春宮の女御の

あながちににくみ給ふらんもあやしう わが

かう思ふも心うしとぞみづからおぼし

かへされける

大かたに花のすがたを見ましかば

をさなのうへにかを差されよ
のかたきこ細思のおくそこ心
前はさくくべしどの源乃
王がこのあられさらまれ
てんまうみとこと右方なら
まーうハ源のよを之儀く
なふるすもあうまーしとく
おんのくらかなりくんるす
細々やうの御方ハ今まうこ
つま吹べきこるすそすらはバ御
心へはやくわうべきこ地なを
草子便之
弘おうに　師　おうくのを
心わしこ思おふ心よせて
細　桃わうしとくとるすぐきに
つかるゝをうまたられらくハを
人れからり　万吉七　默然不
有
秘抄云　河　細　微　慮敬従
統ニ廟をかそ殿と点を　箋曰
是も具くれ
三ノのくわ　河　弘徽殿ハ南
小ハ細いとはりしらるあり

のぼられけるや。ハ瀬ものくらかなりける人ぞと。
いかそまちらるん。東いくうあけくかなん。さ
くてもち。上達部などのくわれ。右大臣の人
らせおひあれバのぼやうよやりぬるよ月
いとわりさいぞくおかしきを源氏の君
あひらちよそこともへかゝりくる御局く給ひなれバ。
うへのハへぞこころやもこころでかうくよねかりひ
つあね給よりしさりぬへきひまもやあうこと。
みらつかまうりど。まりかなら思ひてうく
ひあはりとくさらへきとくらをさして
きれいくらなむけるてなをわくしよ。弘徽
殿の御そしよのよ云まり給へれバ二の心ち

あきさら。女御はいかへのばつかりよみ。居うかく
まうのかりまひまきれバ人まくかずし給
まうひあまりわくのくるとあきそ人をと
ともせむとやうめくく世の中のあやまち
いまうそりしとせらく。やよくのかりてのぞ
き給人はされ給ふるべし。いと思うら給はし
あかちこ心のなべての人とは思しぬ弘徽
ろづきまよめう給ぞせうきうらおぼしてこ
まるさ御まくろりのかいとくまてそふと
御をとくへ給。女御そうしと給りぬる気色て
てあるむくつけくうそそとの事どもかなぬっ
うしましさらく

弘徽殿ハ富あそくまくる北壺宿かたりしこ
源の男々く
樞戸
音
是勝月秋の内侍之
弘徽
細殿の事語て語之　源の々く
たまをしとえ伺く
源治之

先やうらの身上にあまち
戸也　梓子遣戸之　箋曰
帳　弘徽殿のあまにさうら
扉　あうかうれしと細殿と
いふあそこのへある前に戸
三ツあり南の身上にあうら
くるさしきわうかせ之
おのるこそとに　西ノ
とよくまさもしりるこめさて
長橋　くらし戸とも云
本ハうう戸とも号まち
あり　箋曰　仰　秋説云くらさく
どもとも云　不用之
あらふるく世の中のあやまち
ハもちろざり　哢　世よのあや
まちあるくやるがとと思ひ
やさしされかうハ源氏の衣
のあやうらハ言ひてあり
之　細　思うすよ物ろ人うくと
世ちのへのあやまちハ必恥
なりくし　仰　世の中にあや
まちあう人ハせうのよ文へ
まげりての事そこと思ひく
しまうらがの思欲くまちがれ

てをまつのみわかき人のあやまちハあらで未通の明子にいたく人のあやまちハあれとも人の本
よをおもひあやまりて未通女の
ゆかりの月秋よ　河　新古ちかもりしなとて　ぬ美の表ハ　勝月よ　なくものをおもひて吟しけるに　未通女里
師　みかりのそおもきしと本文へくらく此草紙よかくのみ知りし女の月をとめて吟しけるに
こなたさ海よくりのら　孟　こなたさ海よへとある本あり　その字不用也ととく　暁　かハ数の題よ
おもれ　ちら　師　源の家をふ方へあらそこなたさ海よくるとちらなくへし　抱の字ハ不紀
くるりのへとあし抱の字よおれし
かるこ秋の　細　かやうよおもひもうけざるハゆかりけすらぬ契りてハなきならく　孟　まへよ女のてう
をせざの身を吟ずる八月
の表をあらせ上句ハきた
下の句入方の打出月をさ
やうなりと契の知れるけ
すらぬといつらや　師　此
秋のさま代あらぬハさ
よ源さ契ぞとのりしく
すらハみみ人よゆるされぬ
細　源の自称よハあらぬ人
よゆるされしと計略よ
の語さしと人よすま所也
のことし　師　源氏の自讃よ
あれぬをそれぬりしと女
ろまちらぜんしあさ秀の
題し　師　此段患皆女のうまへ
しりはかりし　勝月秋

源
あらさ秋の表をあらも入月のゆかりけ
すらぬ契りとぞ思ひとてやよしといかなるさしれ
さ海よや
してとハなましとそ川おさむしきにあきれ
源心之
さら海いとなけりしかりしおかなり、ま
女さ海之
あつきくこうまへのとりまへどもまるハさ
自人よゆるされしハめしらせうらしもらで
細
うこしかあら人さく思ひてこその語て念
細
よ此表ならきらしと吟をさめなく
勝月

のとくまへつく独あらさ謡
つるあよむやまちあり
女ハ又くもさてハ稚なのを
ぬいしれ記よあり、唐の
書にあれしとして鶴らくせ
のあれかさうかず詩に見え
えさうむかをくるさるす
みすくへし
なるをあのりしあ人
サイ
杯とる酒なをつくへし　宴
ぜん
前よりゐのりらあへての
さ海へどしあ乃くるけるゆへ
また又くやうより乃る白あち
そへし
細
うさ男せより
勝月秋の事くしかし此
ありおらくはかなくなり
とうば草のつくまでも名
添へきるすなるよ名乃の
せぐてハされともうねとそ
向ぎしてとうら倉さうや
りうらちさうの事也　孟　暁同

細　女の前後之
さぬんまらうのびしとあらるりのかくなあさけ
女の心源よあるかきことて
なくらはぐしらハみえじなどあるり、悪しくて　源氏もし
妾をうに中しくきれるかのあるま
ちや例なりしらざりせん、ゆるさんことハふち
あしこるよ、女をもわかくさまやしそ、つくるさ包
源氏らく
をまつぬなりぬべしらつあしとこの不よ程
素秋のと
なまく鳴めゆハあつ源あいつてし、女ハまし
細
てさ海ぐくよおもひをうれしうきもし狂なり。
細源の闘へ
細
なかをなのりしのへいざそうくさまあかへさうう
勝月秋もと秋半もそれハえやかみあらしく
でやそかんとはさうしもゆかされじるとく
乃語へで
勝月
うさ男世よやぞて情あへ言ねてよ悪みの
京をばとうじとや思とうふさ海えんよなし海め

ことわりや。きこえたがへたるもじ
かなとて
源 いづれぞと露のやどりをわかむまに
こざゝがはらに風もこそふけ
わづらはしくおぼすことならずはいかでかつゝまん
すかい給ふかともえいひあへず
人々おきさはぎうへのつぼねにまゐりちがふ
けしきども。しげくまよへば。いとわりなくて
あふぎばかりをしるしにとりかへて出給ぬ。
きりつぼには。ひとびとおほくさぶらひて
おどろきたる人もあれば
かゝるを忍びありきかなとつきしろひつゝ

こゝりやすくさへさるも
きらあらそ　細　源の詞也
ハほどちかきなとしげまさ
かくあらぞとゝ之河海説也
可然義なるよハしらうくの事
とさとめ　河　源氏詞也
のらしまへいうぞかこゝろ也
べきとそれしら君の事に
うき身世にやがてきえなば
ハ尋ねても草の原をぞ
とりまやそふとくみらん
かゞすわくべきそもとつら
づこよ名のくまにハ心あくまも
草のちくさぞかしハ[illegible]
こゝろへ源氏御詞そしと
ちりやさらしぶんへちら
とくちみしていふまぞ
と露のやどりをわくま
まかるゝかゞりて風もし
そよふと後りもあるべく
いづれぞとしる人わけるを
おほかりつなりなへし
し源しいつさゝたるをそ
いふゝみかしゝらんし　孟同

源詞也　山下水説之
師 こゝもおなじくきさきの御かたへまゐりちがふ[illegible]
あさといふはさし同わん[illegible]
孟 さしつくろふ
源の詞也
源をさそふ
細 弘徽殿之 師 弘徽殿の上の御局 注 之
おむかへのひとびと[illegible]
細 又かへて之 源のおもひありて
細 かくの君 源かわれハ[illegible]
細 源氏之[illegible]
師 源の[illegible]

花 きこえしらずうと云詞ハ源のおもひまどふなどと女のおもふごとくて名のらぬハと
ふまれなどうてて草の原をとハじや(とや)源のいへるを[illegible]
ハずともにおぼさるハとおほすれども花宴れやどりを[illegible]
[illegible]名のりおへといへる心[illegible]
[illegible]下の[illegible]こさゝがはらに風もこそ[illegible]
べきいられこそまづ[illegible]下の[illegible]
まづろべきとこ[illegible]の風[illegible]
といひきかせあらくそんと[illegible]なり　師 河 細 孟の[illegible]花[illegible]
後ともまこのむところはたつねへし
細 此人ハ弘徽殿女御の人[illegible]
いづれぞと
まつあらくさつしきるも[illegible]
[illegible]
と太大臣との風もちらしく露もすこしねごとくたちとく　細
[illegible]　朧月
[illegible]　師 朧月夜の[illegible]
をいひのあるハ名をさゝかのをハつくさ[illegible]
あふさつかれと[illegible]に　花 白氏文集[illegible]人の扇をとりかへてとまで又東坡
詩云　換扇惟逢春夢婆　と[illegible]春夢婆ハ女の異名之唐士にハ丈姫の扇をとなす[illegible]
[illegible]扇を取換る[illegible]

そらねをぞしあへる。いり給ひてふし給へれど
ねいられず。をかしかりつる人のさまかな。女御
の御おとうとたちにこそはあらめ[illegible]
源氏之
源氏之
弘徽殿
源[illegible]

なれぬハ五六の君ならんかし。そちの宮の北乃
方の頭中将のすさめぬ四の君なとこそよしと
きゝしか。なか〳〵それならましかハ今すこし
をかしからまし。六ハ春宮にたて
まつらんと心ざし給へるをいとほしう
もあるべいかな。わづらはしう尋ねんほども
まぎらはし。さてたえなんとハおもハぬけしき
なりつるを、いかなれバことかよはすべきさま
ををしへずなりぬらんなど、よろづに思ふ
も心のとまるなるべし。かやうなるにつけても
まづかのわたりのありさまのこよなうおくまり
たるはやと、ありがたうおもひくらべられ給ふ。

その日ハ後宴のことありて、まぎれくらし
給ひつ。さうの琴つかうまつり給ふ。昨日のこと
よりもなまめかしうおもしろし。藤つぼハ
暁にまうのぼり給ひにけり。かの有明出や
しぬらんと心もそらにて、思ひいたらぬくま
なきよしきよ、惟光をつけてうかゞはせ給ひけれバ
御前よりまかで給ひけるほどに、只今北の陣
よりかねてよりかくれたちて侍り
つる車どもまかり出る。御かた〴〵の里人侍り
つる中に四位少将右中弁などいそぎ出て
をくりし侍りつるや、弘徽殿の御あかれなら
んとみ給へつる。けしうハあらぬけはひども

なろそ、ふる海三どうり桜にしきて由ろよ

きじむねうらつぶれ給ふいかゞせしいづれとも

らんち、ゆくぐわしく[illegible]しくしうりて

まされんもいでまほしや。ゆかしき人のありさま

くえさまめね[illegible]

まとそしおくそてあらんもさいとくちれし

かくべきれしバいつまぜんのしと[illegible]

はくぐくとわずねんみつまつ。姫君にまつまでぐ

すもん。日比よかれバいそてやあらんとらうしく

[illegible]の扇いさうの[illegible]

めそこうさ方よりもてめつ月どもさそて[illegible]

[illegible]

[illegible]

さ海のこゝろようりきあらんハ

[illegible]月

[illegible]二条院へ[illegible]

[illegible]

まつ人なれるやうかりや
あらんことも云源の紫を
そぞそこあ和歌ひと也し
やつかくよめる歌云
河かぜ
河かぜ河の瀬々のやうく
さゝやくらやうくうまかゝる
歌はなりくて心やさしくある
つまハ[illegible]し 下冒備る玉葉
和律
玉葉の新の[illegible]
ハ詠歌とぞいへり。後ハ[illegible]
後撰集れハやうく[illegible]
歌ハわくてとぞいへり。あふ
ひのうへの、ことをだして
うしの緒くの下の[illegible]
とうのまくてしきつても[illegible]
ハ歌さらつましく玉葉の
田よわりぞにて云る
へし 細 蓋ハのことと[illegible]
あらとだいも花鳥二釈
さらつまとわをとそひよ
世に云まるくさるそ
ハ[illegible]こ此 咲日
いまりの次世四代 河海
[illegible]物語の上

の次第しへなれども人かれ[illegible]
とやまぢらんと云ぞ[illegible]
ものとりのがくち、清しいまじくく
らしてもぐ緒を、例のとくらか[illegible]
とぞ、今もいとまうりかしいされてわりる
くハあうひましんハ[illegible]の[illegible]
やまとめんし緒をず、つゞくと[illegible]
河霧しめくされてさうのれこ[illegible]
つそ、何つてまめる歌いみづくて[illegible]
緒糸しわてりあひて、一日のけう[illegible]
し咲し緒こらひとしひめてめいに[illegible]
次世、四代とあんりん侍めれど、[illegible]

明
ゆくハ只道へしき申まてらへし代の物よりくらべりし代と云く
周文武成康云々、湯成先孝[illegible]多醍醐まんべきも、貞信公元慶四年誕生たれば、延長元年
四代之下時左大臣也、最モ是可キ擬ス也、又彼ノ公延長八年九月廿八日朱雀受禅ノ日、摂政大
臣兼漂巻、以前、無摂政之号、延喜御代内覧臣、計テ無関白之号也
細 詩どとをかめさうかり
景迹行能 日本紀 天武紀、
下壬十一年八月癸未 景迹
をハ[illegible]く[illegible]
のかぶをありて面白きと云
たらんし人が夜をかめさ
ろところみをもおきて称二
まうがそれもんでもあわりて
然人ハをいうり 花 会文景迹
の二字をハ形迹と大せり。
人の縦迹のもてかれるを
よりで宴の[illegible]
[illegible]のまくれなるを
[illegible]文景迹ハ[illegible]
とらそて[illegible]
[illegible]景迹たる
[illegible]人の行迹とてそぬ
しの貞香を[illegible]
ん通[illegible]さ

皇御代代四代の[illegible]摂
まどもきやうぶくよおひびくりのねどき
形迹之 景迹之 朱 樂
とのかりてしまひのうかへしハ八侍く
文人樂人の朝二
きりつかさらくのりのまでども称
旧代の[illegible]
りうらかひくらしうちうろしめしと[illegible]
[illegible]
ませまぬるけがはひさそ[illegible]
[illegible]
めべきならかんし侍しとききらんあし
よとくのへをこるにとよる侍く[illegible]
新
けいとにぞあつかりのあさ[illegible]
師
こみ為侍しかりかとり[illegible]
経代
苑まうとまこうぶの例ともかり[illegible]

七

何くにゝもやりて見るべきせ　孟入道右府云わろき也又宜心之　暁にハわかるゝ道くへどしらぬ（か）
ことなる云細云こく河海よハあてハなり（ぬ）く式云なりくとかしく夜要きく
旅まれもなどく　明　むしくハ殆也まうるよとりにぞ義し。花　戌中ねうきとまきひしにけては（ハ）りく
かりて（ねん）さんちのおりしらく相別にちからをまかり　細　別勅
そしうりのゝしくとを　細　替しうハ　新の字をぐびんく公方の御肩ならしてハ出つくへりして
くれ居る者の中に物の上ハみじあうをハりしおりしゆうらく　咲日ゆゑいとも（ま）うちねしうく
君やなまぶさとしわうひんうしらく
行花花ゆくとくとこうくハいの例　細　頭中将の舞踊しぬ源の（ま）よ
まうしてさう加く云ゆは　細　替ゆうも　孟　左大臣の御めの（と）よね中将の事を（ぞ）言よの
お隠つく相之議の御代のめ　いかく（か）らべきゆ（か）なとく
暁　まうしてまた臣の舞能（服）
しらハ（次）人（よ）る代の西国なら
べしとゆかやおのあるらゐ
なりてのゆかく
きし（よ）さしく　ゆ（まし）てさかゆく末は　暁　左大臣方の（え）
へらましかばせのめいがしあやはしゝと　細　西人之弟上の兄弟之暁　右府息之或本中将弁と云之西人
男（の）弁の中将かむしまいりあひてうら　（暁）
うや　西
らんはせなりまりし（?）ぐらく　背　押ニ　柄よまりさくひなのふ（か）き云之
どもきこへずそてあそび給いしめ白
（しの）みるのきいハぐ（を）りしう（?）さゆ　まだ勝月のうすなり　保子宮之（ゆ）あしらて
しおく（ゆ）ひし給ひしうりしかゆ（ら）（?）しかる　八日ニ
（孟）家（ハ）いろ月つれ（ハ）よ
細云君にまり（?）成べきとなり
孟　景（?）院（云）へ勝月夜の
ゆとのまちによ　河　三ノ年ノ弓結也
踏哥後宴弓結延喜十
年二月廿二日御記云踏
掌（?）八（?）孫達任踏哥後宴
云く御射場中ニ親王左大臣
以下侍臣召殿上上（納）領
召立書列姫例御賭臣
下ニ賭　細　今年右大臣の家
にて踏哥の後宴に弓をあそ
暁　踏哥の後宴ゝ弓ともおわ
あるりなりて花ニ宴のれ
ともそへ（ハ）にはなもひわり
（ぐ）その結ハ家の花の家あ
（と）われく田数院御集ニ
弓結の比家にて（?）世結
し（ふ）弓ろうの中式場にし
こいつ時ハあやしくわそハ
あしつら（ねり）（?）弓の結ハ
らぞあまゝ勝負をまし
さ（ろ）く弓結へりし禁中ニ
てあるすなりさ（ぞ）大臣の
家にてゆゝみひらくれしく
（かみ）もかの（え）よしあふ
河　藤香舎藤花宴有（?）
はかう月ごろもすぐしつゝ（?）め（?）れん　（勝）月之
いとゞ（?）ものなげ（か）しうみゆれ　細　源氏
男もたづね給はんにあとはかなく　右大臣の（姫）の事とも推しはかれ
（一）向まされ（お）もひてあたれて
どいつれとも（し）らでことにゆるし給はぬ　細　弘徽殿のあたりの人をゝ
わたりにかゝづらはむも人わろくおもひわづ
らひ給ふにやよひの廿日余日の右の大殿の　弘徽殿の（之）
のゆみのけちに上達部みこたちおほくつどへ給　え（ん）まろめ
てやがて藤の花のえんし給ふ花ざかりは　（か）だ
過にたるをほかのちりなんとや　盛ハ過ぎたる（也）
をしへられけんおくれてさく桜二木ぞいと面白　（よ）ろ（や）さ（き）
きあたらしうつくりたる殿を宮たちの　霞殿（な）る（べ）し
ちの御もぎの日みがきしつらはれ（た）り　（ゑ）大臣（家）（?）

延喜二年三月廿日左大臣飛香舎藤花下ニ有献物事 [illegible]
へて左大臣の亭ニおはしまして藤花の宴あり。又天暦二年四月十二日飛香舎藤花宴あり[illegible]
管絃あり
[illegible]

[illegible]

右大臣
わが宿の花しなべての色ならばなにかはさらに君をまたまし

[illegible]

かし綾之充ら彼のうらのさハ面白きうらの滑よ撞著の裏を付らる人倚着りまも
有職抄 今あまりしのさハ地の色ハ何あらくも紋ハきてこの条りしハ一色あらくこと織
さうらし唐織物二色と織物のごとし唐装束らく着さらくりまふされるて下襲らへの
襲なども唐の綺を用ひらとし三条白
きりいとゐらぐいらて 抄 下襲表のうら之則裾のうち 細 直衣布袴らいふ者也西宮記云三臈者
直衣下着 之 袍表と随徒不帯 劔 ニ今案袍よ下襲表と云あらとも布袴とハ云上下
東帯之事也直衣布袴ハ綜 時ハ事也帯ハ石帯也晴時ハ着府縫腋太刀ニ云ニ
ふたの人ハさるの色のさうるとこよ 細 ある人ハ袍と云て下襲と位袍とニ
ある其位よあうて分け 条の色を云ふ 花鳥 装束よさるを位袍ニ二色あらく
あされさらあるこうさつさ 花鳥 事を好よ色どりけりさまあらうがあらしけ
なさらんやも霰の袍よ縫きらごとし綾川ハさいの事にて直衣よ錦をらうのあるて
けなきこ色ありのていふべしおくれらいぞれさうことをさんさりたう一白かへ王乃
さつさ大人の色うるさらあるくてあらくて大直衣ももぶちくさをとあうちんあまりてあとりて候わり
御衣経不開
いれぬれ 盃 霰 ンンつきら
しづ衣よ
あらしとさ角ぶしぬれ
秘府の裏よ衣を色ね八口
たらく面のさへあしぬれ
がつてとわいもそらう
まておつきれいかく奥
もさむらぶとく候のさ角
とおあくろく 御 乳の白
ひゆのれり人源のあり
いけられいりさ角つる流と角げとよいしとたな
かなしつ紅白にかひとをけとされて中くらどさ角
しにさんおそびがどいらも仏しをろうし
ありさとも 源をそうしかけゆく猪よ源氏のさこ
細く(?)勝く
いさうらいかやありさ角ありてあしさのむ
さ角よ女をあされされハ源
のゆうし又語りて奥らあ
らうく餘よ念てらく
袖口なども色の出々
ふちさしとまうめき
よのどくをもてくる
雛 諸子の向のおらむる
ありもとまりて心ひ
あのえし 勅 袖口とハ慶
のゆうら女房の色の袖
をいでさえどの世ら大
饗などの晴の義式の時
そてゐねあり又車ら
も袖をいださく 細 六
らろくけうをわらとあ
そうるさらくし光あり
こ色らく光 栄花 物語ニ
枇杷殿 姸子三条后名 の大
饗よ女房の袖口つらく
しくあされるらとも 野 太
おあ院の 実 賢 殊 ちらし
ゐれのあり いまの 抱 緒子と
花 徽殿の女房の出て
かあるあちて袖口も同ま
まどされきらあぬぎん夜よ五一の女三の 花 菜子 号二品宮 下 薫君之 高帝院
又乃やうしゅんさんげしのとらうよゆらし 源氏のさ
てまりるまつりぶらいもうとのつまよある 寝衣のさ
つてあれハおりつしとうとをあけたうて
わぞいつそみうらい袖くうつやもしくのの
ゆり地(?)りて ことをさうのめきうそある
とふうさうしんけ 河 不祥 八十三 日本紀 ありて 川藤つぞむ さかほを
地(?)出しのおやまとうらいていら
ゑるしられてらびかてやうらしとそれども
此のゆんまつそつけあゆくさせあそしめ
よそこつまぐのきち氏ひのよ地(?)かへて あれ
まうつうしてのうねんくて 承 香 殿 あふんとゆすき

まらぞうりおさうれまうと源氏の君ハわきえしりしれどもひまふて蓋わうりのまハるゝうまく
くしくハまうりの君ひわくせあかく 細 家よりの源りのまゝ方とまゝしハ葵上ゑりしとみりうるこ宮まえね
まいり蓋つぐまゝぶりを
蓋源りとといひかくしされじく
河ふもうくる也 細 花宴の後西向し。御まてハ只姫宮達をさしちるの義よす花宴云こ
花伊勢物語の河く花のまゝすまゝくる人を見わるこへ業平中将の事中納言の事みそしうめまよ
さまゝる蔵花をもあうるといふり。ふハ忠仁公 良房の家也のまう人を思ひせらく。わかうし相うり
みゑきり殿まとの二条の地をいふ忠仁公まね也くるゝうけまこそくるせ給うめと源氏の
宮へうるも君の花まうけしきの相くし
あるまゝうり 細 家まゝまうふく被女房のまゝしさ御の地をも擬りかハまれし殿
弘徽殿の御方の女一宮女三宮やどくハみる子源氏の姉妹まくまゝすかしや。花人をも
ちぐさきゆかりどもまらうれといふハ女房もわうしとや
さ殿とまくまゝまゝ物語 細 弘徽殿の事の
御まゝくめぬとくへ塗虫
まもまもみな宮の人の用
ことよろしく 唯いつまゝ
かめぬさ殿之そくくるき
なまいんみそかのうちう
どかくさるすとどりさ
わのまゝるくしゝしうね
をゆり殿さ殿しいうり作そ
しるさきかのりま 箋 孟 抄
よきまでおりしかそ也

ゆかりハかこちはべれといふけしきを はのく
おもゝしうハあらねどをしなべての 心をほく
わかうどもにハあらずあてにをかしきけはひしる
しそらたき物いとけふたうくゆりてきぬ
のおとなひいとはなやかにふるまひな 孟 わかうさまハ此さの事と
して心にくゝおくまりたるけはひハ

ア不審。塗虫の巻よ八女三宮の女房どもひゝうどもあやうしてあるまゝまくそかゝぐちくせへさ
しまりめでまゝるまよくいハつの 孟 源そしらひわぬでそよみれおとし見さとをみしへかひから
うしもわうりの花もしされと 今世様く
細 勝月夜のまゝく 拾 家まそ
ぎしめでよ物がしのまゝよ
まそいつまゝのまうけとまゝ
まへさまそへいろうれどかく
之御く或說女三宮も也く
しく人者さゝとてわかく
ゑやうの鈴幸ゝすハあゐま
しるしさまり
扇をとりかへ 細 信るま
石川の吉 石はのこまうど
よ帯をとられてとあるを
扇しこといひかへ給ふ事ハ
むかしへわかんどうんと云
ての歌く 紀 源の君扇管
をとるへんをうりてよく
よひあかし扇のもハやう
くそうえつきさのんく
抄 出書 不及々 紫式部の君
所存ならひむかしる難人の
作しとし
あやしうもさまへける

たちおくれいまめかしきことをこのみたるわたりにて
やむごとなき御方々もの見給ふとてこの 細 女宮達の見物の事也
へちあまつるなるへし。さしもあるまじき
ことなれどさすがにおかしうおぼされていづれならん 扇の事かく
とむねうちつぶれて扇をとられてからき 孟 源氏にきこえあつく 孟 麗人の事り
めをみるとうちおほどけたる声にいひ 狭細 考へあ声く
なしてよりゐ給へり。あやしくもさまかへける高麗 女房の詞也
人かなといらふるハ心しらぬにやあらん
いらへハせでたゞ時々うちなげくけはひする方に 源氏く
よりかゝりてきちやうごしに手をとらへて 注 也
あづさゆみいるさの山にまどふかなほのみし 源 なるの君宮く 側見

細 かく(?)注ニハ一面此扇のうすとハえてわ人々ゆらしや 花 いろなどえならぬ人ハ源氏君のうへ猶りえぬるぞときこえて源
氏のうへの扇をとらせてさるわざこそ此河の扇ならば筆をとられて 此花をかくこうの筆を花田[illegible]中ハ紀
ゆくへハせぞ 細 此人ゆかしくて扇をとらせて源氏君ハへをやらうとこのたてそうらなむとげぐあらひ
さまあしつれなきを源氏君ハ召もやしらうさぬれて古にほり居てあそど みりあまりて
ありきさう 細 今日ハこうの猶か
れば猶あり一回の夕日とそ
花 夕の紙の日をすれば猶
夕きの山といひうかの[illegible]
ハ[illegible]の枕の花そぞのつ夕日
とぞ[illegible]しうらんつく

腴月
よの猶とえるのだぬりあすへし
細 さてハ扇の紙をとう(?)猶し腴月歌のそてくえ思ひあく ねこ[illegible]
一月のうおやしゆうしやりゅゆへしとしあそ
こうえいりうこけしゃせハゆとハうの月よ
さるえしれ出おのえもましや・えどいふと思ふてく 細 [illegible]
ゆすま出へとと 細 何ゆへまじまきそ
とぞ師ありもらんかならな
きへ給ますふうくまとのふと
ありう 細 からくんまつりさう[illegible]
秋ハ天狗所[illegible]之 腴月 秋出此三月廿日館られハやうくう猶月[illegible]
と源の西[illegible]中の文字[illegible]そうりて[illegible]や 明 日[illegible]の御集う猶の此文よまてしせあてちうりの山の夫
さうて今日[illegible]ひくしく雑そ去しうりうりの 夫 星[illegible]てち猶てらう月ハ山のえよそれ去と[illegible]わん
いうらんしきかうく 花 まの家とうづすうやあふさは 其今の色とハ其[illegible]のいうえれぬかうの猶猶西
ゆくまなせうのうつく恍くてハあれどもいまうこえの君とハ[illegible]よりこぬと[illegible]もせうり 細 花寺猶西の[illegible]
後師猶此猶猶ハ後あとうすへ猶中ハあれしくハわれども女の身にてこらぞうらくしこもしれたる
花源氏の雅さいつへよもしあり[illegible]ん源氏の中ふも此巻をぐれさうく後世て古市畜の言合の
おふも業武[illegible]ハあるきしの[illegible]くし[illegible]わ中首へ殊勝の上花宴の巻ハこうえよ難ゆうれへえいへ
曉義盈の[illegible] 細よゆあし